伊是名玉御殿（伊是名村）

沖縄歴史の散歩道 vol.16

◆墓を巡る②

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。

古琉球時代の高い身分の墓は、木造建物に遺骨を入れた木棺を安置する様式が数多くみられました。13～14世紀頃の英祖王一族を葬った浦添ようどれ（浦添市）は浦添グスク北側の崖下の洞窟を石垣でふさいで墓としていますが、創建当初は洞窟内に建てられた高麗系の灰色瓦が載る木造建物で、その内部に朱漆塗りの木棺を納めるスタイルだったと考えられています。

第二尚氏一族を葬った伊是名玉御殿（伊是名村）も、創建当初（15世紀後半～16世紀前半）は瓦ぶき建物で、その内部には入子状にさらに板ぶき屋根の建物がある特異な構造で、その中に遺骨を納める石厨子があったと記録されています。やがて老朽化により1688年、新たに石造の墓室を造営、場所も現地に移され、現在見るような姿になりました。このように木造建物の墓はメンテナンスの問題もあったことから近世にかけて石造へと改修されたことがわかります。

伊是名玉御殿の石造墓（伊是名村）

同じく古琉球期の墓に掘込墓があります。自然の洞窟を利用するか崖に横穴を掘って墓室とし、入口は石垣や漆喰でふさぐ方式です。改修後の浦添ようどれや小禄墓（宜野湾市）、第一尚氏を葬った天山陵（那覇市首里）などが挙げられます。15世紀頃の沖縄の墓の様子を伝える『朝鮮王朝実録』の見聞録には「国王の墓は岩を掘り込んで穴をつくり、板戸で閉鎖して墓とし、墓室前には石垣をめぐらせる。庶民はただ崖のくぼみだけを利用する」とあります。

浦添ようどれ（浦添市）

ここで首里城北面の崖に「寄内のガマ」という奇妙な場所があります。洞窟の入口を石垣で閉鎖し門が築かれており、浦添ようどれをはじめとした墓の形式と全く同じです。15世紀前半の石敷の遺構は見つかっていますが墓を示す遺物はありません。伝承ではかつて墓があったとされ、後に廃棄され拝所となったと推定されています。首里城の中枢部に近い「墓」ですが、誰を葬っていたかは不明です。前述の記録上でいえば豪華な「王の墓」の形式です。はたしてこの「墓」は誰が眠っていたのでしょうか。

首里城は14世紀、察度王が居住していた伝承があり、高世層理殿という伝説の高楼を建てた話もあります。あるいは察度王統の墓の可能性もありますが、真相は闇の中です。

首里城寄内のガマ遺構（那覇市）

上里 隆史
（うえざと・たかし）

琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』（福音館書店、2020年）、『海の王国・琉球』（ボーダーインク、2018年）、『マンガ沖縄・琉球の歴史』（河出書房新社、2016年）、『尚氏と首里城』（吉川弘文館、2015年）など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「ブラタモリ」案内人などメディアでも活躍。